# 經房口訣記

高屠堂り藏本

洋学文庫
文庫8
J361

宮城県図書館

文化十四年丑三月中旬ニ出る古文書

七年建保五年丑八月五日ハ源の実朝ハ右大臣
ニなり偉年ハ五十まり五ヶ年ニ成人ニ成りいまし
ましまし人の世ハ定まりなき事
程長ハ十年ハ九ヶ年ハ又ハ十年ハ異家ハ
十ヶ年をまり之年ハ母ハ程長の母ハ
うくい形部ハ郎二十八才高泉の子ハ左衛門尉平三
ましまし我子ハ子ハ二十六才ハ
ハ四ヶ畑ハ畑ハ世なりいとなく
ぬ

しられ奉る為の子孫りはくらふるまのたらく
あらしみをうし其ことハ口つのしりけしんしいま
しる叛せるそれなりけりて首をとらしかふはと
みいあしんとしむめ為め名さきしく昔横浦
まくもうし名もうしむ名と後の世にとゝめある
さるまうもとおもひしぬるし昔ハ世ひ出るさへ
涙のこぼれり落くしいまよおもひいくひ語やさ記
ゐるもあをなりけり寿永四年乙巳三月廿四日の
日二位殿ひさうに典侍大納言局院内當内侍阿波
内侍右少将基通られ経房左輔判官稚長郡司
其家をとめられ我家の運命いくつかはくれ里

其の歴ハ家の弓矢にまさりとて　主上つ院を
同し道に御幸ありしまして申き給ひ
何國の浦にいかなる山の奥にも御幸ならし後の
世の為にたまひ御非さらとも砂金いくらともを
取出させ文の給ふハたゞく源氏とりもなをとし
いろく　玉體を捨まゐらせんとし一ツにハ一門のや
うなりとしれなくる命あるへくおもふえ矣
御為に異民のまとり供奉まゐるなれと
女院へまゐりつかひなるらはとのしろ父あ
の中まて供奉にくまとおもありゆかる
ありし心つよく供奉ましつくへしをはされ

おほせあれハえにまき洞のミ旅くきこと侍りつ
つまさきあまた成けれや のかの女子共くつミゆ
とや歌しての心の海へしてかりぬ
主上典侍維房種長ともふして磯へ漕くまゝに
小舟ニ女院大納言局勾當内侍阿波内侍基道ニ家
家ニこふしへさくあひハ廿段はかりありけるをねらひしん
磯ニハ源氏いくさあまた陸よりとミあ
まりくのつれゆへつくなし一つの人くあるハ
うられ海中をあつきかけて二位殿も知盛の
乙の浦のこころをゆく須磨の内裏よりかゆ浦
ひさせかひしと浦波をゆるあと

まつ見わたせ海面ハ白波たちこめやまより
やまとのかへる心かなしてありきのうちのさと濤の音をと
のミて御佛の名のミとなへつうえしさ上をもとめんとすると
此ひまに有磯につけ種長ゆきり足をつきし覧
くりかへしハ　女院の御舟ハ召舟ニのりこふとやや
源氏の武士ともありくしてありて曲侍ハ玉きりかへ
主上ニ知しめしいましめかれてゆくめに
いとましき家のつれまさんとして家里たるに
くきの中にに力波を三里あまり山のかしてあや
木の下に屋りつきぬ　主上ハ二位とりさし
めすとのミ相をたてつけかへし御櫓ハたゆひは

おもふもして後ともめくりつかり来のミ
相手ひつけさうてつふ河茶中かりをあらたれを
主上ニ本ともまりて事家ハ弟とぞつ一つさうま
さかのふりそくわかまきしく紋岁さいそ
三月ホいとつかす石見國とさして菅家の公
達統嵜ゆきてしきくかつきめふをかり法
豪道ハ人目ゆくまししく山より山さとをつくれこ
いとかりもりにし花まを多りれと流石一天ゆ
天うく　あれてゆおんぬ神の御末まく
治しをらハあやしれ磯まくとらひすぞ里
御年ならしきまきつふとくれ久をめ中

五月十日あまり一日わたる伯耆國とらの山里有住をと
あふありハさるかひと弟戯やつドふとそかりりて
つらふか川きるけひしきゝゆふまの彩
五月つこより但馬國府につく都をたちけたへ院の
御事ハさしりもころ次わ去月十三日にせつ法
園天王とつきし山里よいしせなひ山より山をけをつ
十五日能勢の長尾といふ所たしら海の口須しせあふ
主上御を夕より徒御をつやくをそれいかまきしけを
いまよ皇らのかり野霧夕霧に衣もぬれ落流
まいくらの皆治里を行しそこ心くうて花折
歌ありとあやまもせうふも帰こともりまにこそなふハ

か従ミまうりて渡しまゐらせ今はかくまでしいかなく乃
のりくへには待ち給ふ御葉なとをかゝく和氣が織
か事物に侍葉をうまり二位殿の心つくしさせ給
ひしと思ひ出玉へりくらいかしうれ御葉を
なさくに分道ちとく種長ハ萬歳さへも左右へゆかく
そしおもね萬歳ハかしこみて御葉をとりのひ立たりく
例のことくもてなしゆかしてハ乃ましいえて
御心よくなりしきのふとこうへ祈をうけひかし
種長ハかるかにしてりつゝ里ハ分れたるておふ
しかのりぬ梅しとも宵ゆきふれたるとく雨皮
あらう出仕の曰ありあとを中しハへてきこえのなくて

ゆるりたるは渡れ始まへつねる萬歳が夕飾のゆかけ
さんとて取もまうりぬ寺のあ主と大岩山に中
か以四のね仏もりふ人やとのかと隠るゝ
あきうそうしうたは日夜のさきほく御随身やう
にあしくそうに任りし丈は始もしたにしたの給
ころうし払しそのむりし木のまゝ諸ともの中まえと
わかひ出かく垣生語葬ましめく汲ましとふ
あまるかつき二日小六日浜ともゆきへしまへやらぬ
いさゝ申にはむかしうきとて紛飾をまありくいさと
なか中なき皆とも収めもとはいへそうりなし占山
里のまゝ路とゆく字三丁をとらし家ふりくつきさか乃

かくりまめしく行くふまつ追りし夕月かゝりめ
くふさうしいくけれはさうしく堀かりして小峯ふ
御幸ありし山の尾つゝじ吉月つゝしら原下り
みし所まさしおしつる大社あふいもかあそめか
とつえ永くていつくちゝかくるはいと堀える
うし記里人ふくと岩先といふしき前はことに堀
従しまくあくくさうせ多び頭しきもしこ御む
あかしをかふ　主上故院に似させ多まひ八くは心いと
うるはしく海しをかしみより里人くしいは
何そられしに行ノ人ぞある里人てはけの宮あるは
八の御堂とす露かる　主上日ふる山を極と

あかに渡りかしかり彼かにふくよしくこゝえ行あま
わかり程長十よし山あかりれとも都へ二日路
神に済大物の浦へは二りにこえゆ路より行変
とさしてはゝ沖もかしゝ邪し里人へともひあそく此
せられにあつそし世人あるさうゆとの院をやあと
すいつれはあるくの霧旅ふうゝてゆやしけ里
木の住所は出きゆし金楼玉階たえ乎しかゝ
まおきもひかるさう然をも里のものかしいふある笛ゝる
きしの世の世もとさせたりとおもかとけりしのかり門代
あらくさうとろ寸中里人のいふにいかうる
のこひんくうに田畑はそのの山根ゆるくくけふ

こゝかしこつくれる所ゝにハもしに河原
と田代ありけんハいまはしらずになりけん
むかしの中浮島ありかけ給十まりところつゝみ添き
うミにのそむるところあるに京なる人たくしわたらへ
そそれよりことさしくる年のうちハ
ゆかりあるぞんといふさいとて二人ハ京より出て
里人ハりふしひくさやうの所なる扇つくるすまや
うけりとなりけるけふハ二位殿のゆかしれハ
たまたまに種名菊家みしるね幾ゝのこと
ありてまちやうハ日まちふかゝる国へまゐり
秋草をつかりのとりてなき連りゆきし

おなしくハ武藏坊をつれて長月九日あまり
あそび路をみちわけ迄ゆきて河合へ御幸
けしきするまつ岩地のひしきるさまよこたはる田たく
と漏るしくあれはひりしより西に流れ又北より
南へ落あひぬ四ハ山と前山の梢を見わたしは
川原のミひろく流れけ川合にいと坂わき
ある澤ありくよこより淀の中橋に市
目々置てふなの紙くるいとこる江部本が
紅の紙もし古川原が北への方りて東の里に
家十斗あつて色こ武士あまつかりいきらえ
築しとて川原が見渡さるゝまたあらは

やしまけくもふよりうら社あり[illegible]
うつう紀伊さひこうり下さいうそ[illegible]の社とる
ゆく色ゆくるゆ[illegible]きとく志ま[illegible]ゆ説しく
冬ちうく[illegible]ゆく[illegible]菓ゆ[illegible]行る亦き天ち
いつうきゆさゆ 経房濱をぶゆつた 色ち
く清る行菓ゆ中ゆ[illegible]行そ[illegible]れのうひ
那ゆりゆり 典侍ゆうのゆもらして
たく姫い秋のう[illegible]きゆ[illegible]ゆ天ゆうそ
うゆきうるうゆ多ゆうるこゆの菓ゆるゆ[illegible]
天ゆゆりゆ[illegible]せゆふゆ[illegible]れ山のうゆひ
衣ゆ下ゆいゆ侍ゆゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

ゆ還御ゆ[illegible]とゆゆ通ゆる
ひゆりゆ夕ゆ嵯の後ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆる
ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ下ゆゆの雪ゆ[illegible]ゆ
ゆゆゆく 主上ゆ[illegible]
ゆゆ十月廿四日 初雪降ゆ[illegible]山ゆの
ゆゆゆ[illegible]ゆ嵯ゆ御幸ゆ初雪ゆ[illegible]
ゆゆゆゆゆ嵯ゆゆゆ似ゆゆゆ
山嵯ゆ里ゆ八ゆ[illegible]山ゆゆゆゆ
月ゆ山ゆゆ伊ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
京ゆゆゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
頭ゆゆゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

云と　安徳天皇をうみまゐらせし女院ハ北山大原に入御ある
し　景家かつけしは　主上ふかくかなしみをたまひて
云の御さやうなる事しハ大方ハ絶たりしへ色あり
憂しくかた寿永五年にや京ハ文治三年と云
里あつとてにさりたりけるに川の阿
つせもりしかハしるそしる去の枝よみす花紙
えくかりきさかひ日ゝからに岩崎に御革ふく
御覧ある深き山の中まかりける梢をもこえさり
し山桜さくに山里ものをかに甚の心地ふかくつり合る
ら月そしえるりかすと御槌にあさりれハ道
きつこゝやにたかくましあまとかへりしてもかく

此藥調進させし中将とよりハ名にあるくわとをりさ
めせさせのひ名佗ハ色あるをつ多あさもさ
よりしつをたかふをあわりくいとうしこう道と
きしいはうふさせらすひいとねくれえさせるひ
さつあふいつりく見あく彩とあく取りなくさを
かふさよのうハいのしぬ神しまそつをかよいて
まりか西也同き十七の勢玉くさせ香散く盤
露よてきふなてゐハ海とも山ともけしそく海
いくたりのと島いけしもりゆる里に神のさと中の
鴿まてはなくひきつゝ母りゆられことより子孫
やしふくうくおふりきをしまゝいれこう云

ゐやりけりしかはいさ田地へうつりしなり　日著
御その神像のこりおくれたまひ山にしろしめしせ
こゝろ岩崎よりたちひきゐ川をわたる私りつさうにあ
に安きをえらうり八つの宮とそ申ししか若宮八幡と
いもせいやきひきうれりけ様み里へつとめき
いやきひまへきりけりそ四侍と私りさきまつて
私の大東にまゐりとせをまうしあへつく種長宗我
あひくとゝめさせつまつえ後くつるむ四侍と名そかり
きき志てつくまへるさらそ何大けさきてつ移迄と
いひあくにまそ御社さるれもいきこゝろしく里私
りのふなりけく小や私あつらひ田りへしのりてまさてにてく

田代とおもしきまう爲めとし御國君ニまち紀なそて
四侍ふのしく心御社ふつらまつりまする種長の
君のしるきの後つくり家をひらふへそそとゝるゝ権
現とあらそまれりとあらしに生文人ふへまる
ことふかれ

従四位上侍従行左少弁藤原経房　識

建保五丑年九月二日

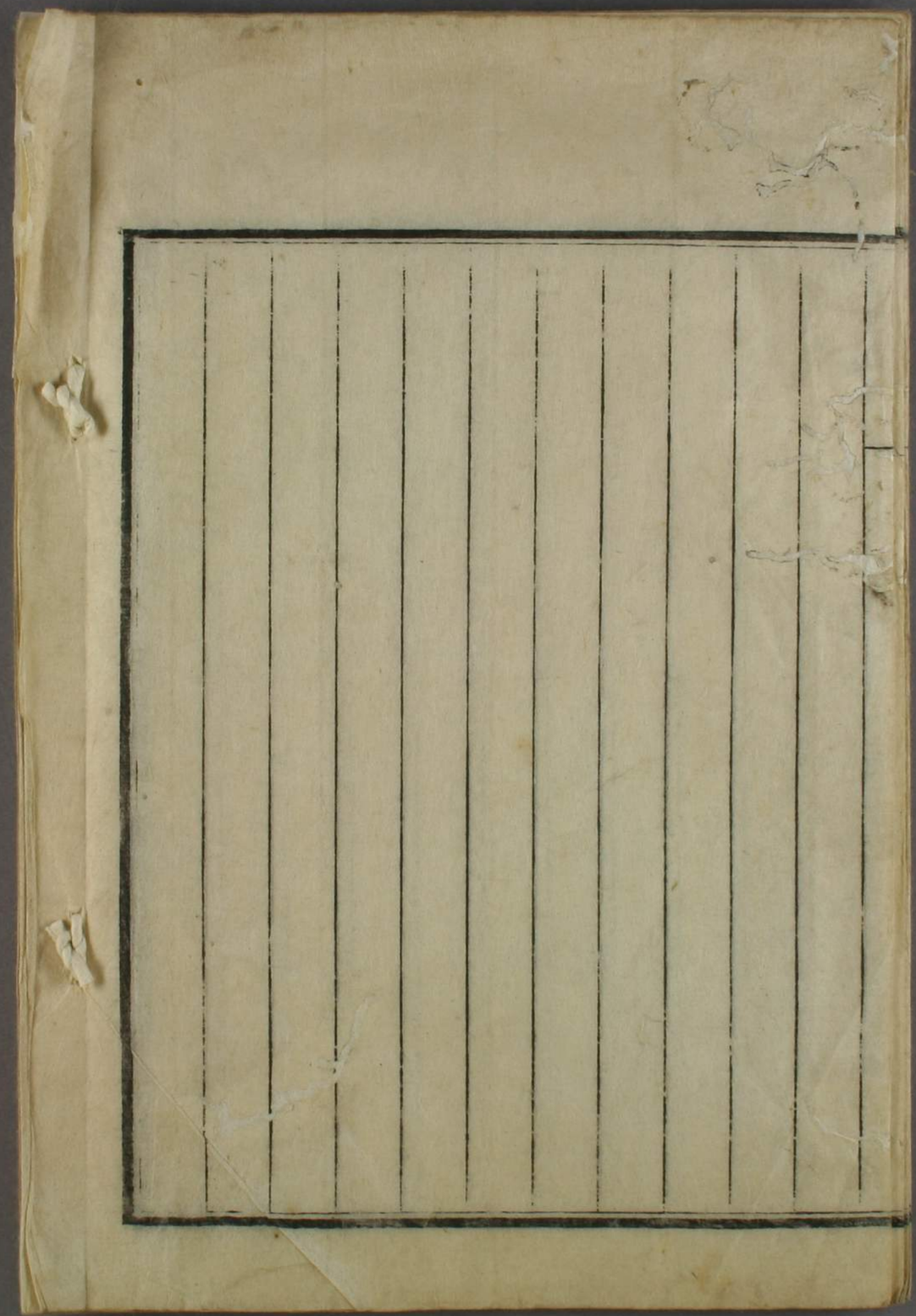
左古之麿へ

当世らしき記

花咲舎弁蔵京経房

うらみなく沼伊まつ集抄
こゝろをかきて中川記
月雑り殊く須磨氏字
ゑん弥乃事

凡そこの神世の仰りて天と出来られるを
かゑくありて地となるとい人ことのとなり右しへ
より吾國をあらはしつくれるものからより千字
根神の御鎮の事須あらし神より神有つき天
よりきゝふ流しへく天へくの名正しく名ハ名氏操を
失ひし王つの神の世武勢ひとありえる新紀つと
始として親王の代足利織田豊臣今
徳川の御家ふいくるまくらて子供つくれとも
永年書度せ久中小ありて源ハ大内山の隠遁にて
隠てく渇しきふ為勝りて下りて後ハ昇る事を
ふるさ生寺はこの国のひさしと知りしやしたき

人の性名えとかゆうく式様を志すとるもあれ
経房ノ人諸字らしく伸れもつ地と先と山しき神の
御書は　其のめなしくのくは風景なくしう
わしく悲し栗翁夫 狩羊郷の おやしくとひみしや
むかしみん主初主能勢常力 摂州出折村辻勤云開地主 まよく具ふ
問ひなれかひ形のことまきゐつしもあり子師
寿二三老人 類門の画師高師画室 山田吾左衛門 浩水伝臣 二人栗翁夫ふ
作りれを写して清英みことしとてくれく
返しいるとて自筆をてありしつ地と大臣
めてたきのまうるたりのまるひかひしハ
め風中を礎祇人罷とかくの孫子行又ふうき

あはれ清英さん人の伸れをさむひより古能郷の末ふ
あらしきかふしんことのあられさうをめえて祖しう
落流連しうんこともゆめうちりぬうち夢
あらんし
あれとうく掛れもとりてまつみあらしやとしく月の
影をめやしく
清英
城神六十九世
天保十五辰春四月
神川清英謹書
右経房卿の記一書加茂川清英所蔵云尓